

古代アメリカ学会 第3回東日本部会研究懇談会のお知らせ

第3回東日本部会研究懇談会を以下の要領で開催します。ふるってご参加下さい。また非会員の方も参加できますので、関心をお持ちの方にはぜひお声をおかけ下さい。参加の事前登録は必要ありません。

【研究懇談会概要】

「同位体分析による南アメリカ考古科学の展開」と題した今回の研究懇談会は、食性分析および放射性炭素年代測定について、放射性・安定同位体比分析を用いた最新の研究成果が発表されます。さらに議論を深めるべく、研究成果に対し考古学・人類学の立場からコメントが提示されます。また学会員の枠を超えて加速器質量分析の専門家を招き、最新の研究動向に触れられる機会にしたいと思います。

発表1 「インカ帝国の統治による影響と食性の地域差—炭素・窒素同位体比を用いた研究—」

【発表者】 瀧上舞（山形大学、日本学術振興会特別研究員 PD）

【コメンテーター】 大平秀一（東海大学文学部教授）・米田穰（東京大学総合研究博物館教授）

【概要】 南米の広域を統治範囲に収めたインカ帝国ではトウモロコシが重要視され、その栽培と流通が促進された。また各地で耕作されたトウモロコシは活発な資源流通によって帝国各地に拡散されたと考えられている。一方で、トウモロコシ摂取はごく僅かで、祭祀の際に用いる程度だったという見解もある。そこで本研究では、インカ帝国内の広範囲にわたる遺跡から出土した個人骨の同位体比分析を行うことで、食性の地域差やインカによる影響についての検証を行った。その結果、遺跡によって C₄植物の摂取量が大きく異なっていたことが明らかになった。特に、インカの影響力の強い遺跡では高い C₄植物の摂取量を示した。南部高地は C₃植物に強く依存し、現代のアンデス中南部高地の根栽農耕文化の報告と一致する食性だったと考えられる。広域での食性の時代変化を調べてみると、15世紀～16世紀前半には、インカの征服によって一部の地域で食性変化が生じているが、基本的には前時代に確立された各地域の食性の傾向を維持していたことが明らかになった。

発表2 「南米における高確度年代推定の危うさ：放射性炭素年代の暦年較正における問題」

【発表者】 大森貴之（東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室特任研究員）

【コメンテーター】 渡部森哉（南山大学人文学部准教授）・米田穰（東京大学総合研究博物館教授）

【概要】 2013年、放射性炭素 (¹⁴C) 年代を暦年代へ変換するために用いる ¹⁴C データセットが大幅に更新された。¹⁴C 年代から推定する絶対年代の確度はこの ¹⁴C データセットの正確さが基本となり、基礎データの拡充と修正が高確度な ¹⁴C 年代推定の応用範囲を着実に広げている。しかし、南米を研究対象とした場合、暦年代の解釈において十分な注意が必要である。特に、赤道付近の大気中 ¹⁴C 変動パターンについては現在も実態がつかめておらず、南半球の ¹⁴C データセット ShCal をもとにした年代推定の正確さについては検証が十分に進められていない。本発表では、ペルー出土樹木の年輪中 ¹⁴C 測定から得られた大気中 ¹⁴C 変動について紹介し、ShCal を用いて暦年較正の問題点について議論する。

【日時】 2014年6月1日（日）

- ・発表1 13:30～14:30（コメント・質疑応答ののち休憩）
- ・発表2 15:15～16:15（コメント・質疑応答ののち 17:30 ころ終了予定）

【会場】：東京大学本郷キャンパス 総合研究博物館 7階ミュージアムホール

<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/information/map.html>

- ・休館中につき博物館の正面玄関は閉まっておりますので、建物南東側の通用口にお越し下さい。開始時間を過ぎてからのご到着の場合、通用口に掲示した指示に従って入館してください。
- ・通用口から入ったのち、階段の左側のエレベーターで7階にお越し下さい。階段の右側のエレベーターは6階までしか上がりません。

【連絡先】：

- ・東日本部会幹事・鶴見英成（東京大学総合研究博物館）et*um.u-tokyo.ac.jp（*を@に換えて下さい）
- ・古代アメリカ学会事務局 jssaa@sa.rwx.jp

【お知らせ】 2014年12月下旬、メソアメリカ研究者を迎えて第4回東日本部会研究懇談会を実施する予定です。詳細が決まり次第あらためて告知させていただきます。